

「北前船が運ぶ、海の幸～昆布屋さんの熱いはなし～」

講師 株式会社四十物昆布
代表取締役 四十物 直之 氏

1. 昆布の産地と種類

昆布には多くの種類があるが、世界で日本の北海道周辺しか生息しない。今は、千島列島、樺太、朝鮮に加え、中国が養殖している。文化大革命以来、日本の技術者が教えて、中国は今、50 万 t の昆布を生産している。日本は約 2 万 t である。昔は、薩摩の財政を建て直すために富山の前田家が密貿易のお手伝いをして、薩摩から琉球を介してどんどん中国に売っていた。それにより薩摩藩が



財を成して借金を返し、なおかつ蓄財をして倒幕に向かって明治維新を迎えたという歴史がある。

富山県民が食する昆布は、1 世帯当たりで日本一である。しかも、金額においては第 2 位の県の倍ぐらい高い、おいしいものを食べている。こんなに昆布を食べるようになった理由の一つは、江戸時代に北前船の寄港地だったからだ。

もう一つは富山県の県東部、特に私どもが今住んでいる富山県黒部市生地という所は大変貧しい漁村だったので、出稼ぎを奨励されて北海道に渡った。根室、歯舞群島、色丹島、知床の羅臼町、利尻島などの他人が開拓をしなかった外れを開拓したのは、この地の人たちであった。四十物昆布が羅臼昆布を得意とするのはそういう関係があるので、仕入れがしやすい。昆布全体の生産は大体 2 万 t だが、羅臼昆布は 300t である。その 300t の 8% の 24t を当社が扱っている。

羅臼昆布は、食べてもおいしく、だしを取っても濃厚である。ただ欠点は、色が出ることだ。成形していない昆布は根っこがちゃんとある。皆さんは、昆布は海の中で立っていると勘違いしていないだろうか。昆布はみんな寝ている。海の林のように立っているのは

海草で、みんな葉っぱを持っている。葉っぱを持っていると海の中に入っても中に空気を持ち、浮くから立つのである。普通の昆布には葉っぱも枝もない。潮が流れていないと寝ているので、潮の流れが速いときは昆布は採れない。

一方、利尻昆布はだしの色が出ず、澄んだきれいなだしができるので、京料理、懐石料理はこの昆布を使う。少し幅が狭い。羅臼昆布の仲間で、羅臼昆布の正式名称は、「利尻系エナガオニコブ」と言う。利尻系統の、柄の長い、大きい昆布という意味である。昆布はあくまで裏方だが、羅臼昆布を使うと表に出る。従って、プロの世界では羅臼昆布はあまり使わない。

真昆布は昆布じめに使われるもので、種類が多い。白口元揃（しろくちもとぞろえ）、黒口元揃（くろくちもとぞろえ）、本場折（ほんばおり）の 3 種類があるが、富山県では促折（そくおり）と言う幅が広く肉が薄いものが流通している。これは長さが 6m ぐらいあると思うが、55cm で折ってある。昆布じめに羅臼昆布を使うともっとおいしいと思う。羅臼昆布の方が肉厚なので、刺身の水分を吸い取って干物になるからだ。日持ちもするし、昆布のグルタミン酸と魚のイノシン酸の相乗効果でおいしくなる。梅かまの昆布のかまぼこは、みんなこの昆布を使っている。

ちなみに、梅かまの会社は今、化粧品会社を立ち上げた。社長に聞くと、社内の昆布かまぼこの担当者だけが手がきれいなので調べてみると、昆布に含まれている成分のうち特にフコイダンという成分が細胞をよみがえらせる作用があることが分かったので、それを化粧品に生かそうということだ。また、私はものすごく酒飲みなのだが、全然肝臓が悪くない。フコイダンが肝細胞の増殖因子を増やすのだそうだ。タカラバイオという会社の臨床試験により、助からないといわれる肝硬変の患者の肝臓の細胞が芽吹くということも分かって、今、医学の世界で研究されている。

それから、長昆布は釧路から根室にかけて採れる昆布で、長さは普通 10m もある。流れの強い所ではもっと長い昆布が採れるが、12~13m の棹（さお）は年寄りには立てられない。潮があればずっと流れてしまう。歯舞の貝殻島の近辺は潮の流れが速いので、天気を見て潮の流れが速いときは出港の許可がなかなか出ない。やはり釧路よりも根室、ノサップ岬の外れのもののおいしい。釧路の方だと親潮と黒潮しか交ざらないが、北方領土の方は根室海峡、国後水道などいろいろな所からの水が交ざって、いい潮目があり、それでいい昆布ができるといわれている。

細目昆布は、とろろ昆布の原料などにしている。少し細い昆布で 1 年物である。昆布には 3 年物はない。2 年もたてば一人前で根っこから枯れていく。それを毎年刈り取ってきちんとしていると、また芽が出てくる。ロシアはあまり昆布を食べないので、北方領土では毎年たくさん昆布が育っているが、海の中は荒れているのではないかと思う。ロシアはいい資源があるのに損をしていると思う。



2. 昆布の栄養と効能・富山の昆布料理

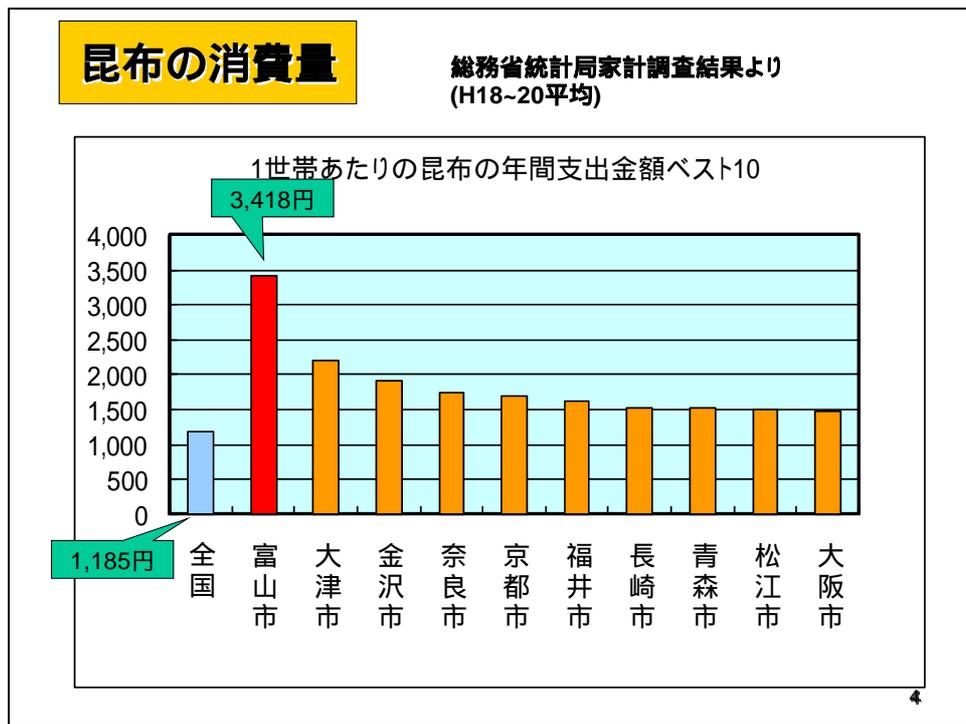
昆布の栄養と効能については皆さまも大体ご存じのとおりである。アミノ酸のラミニンを含んでいるので血圧を下げる効果があり、ナトリウムを追い出す作用があるカリウムも含んでいる。従って、昆布の塩味は別に気にしないでほしい。

また、食物繊維が非常に多いので、お通じにもいい。カルシウムは牛乳の7倍もある。それから、がん細胞の自己消滅を誘導する。アポトーシス（自殺）させるそうだ。昆布に含まれているリフコイダンによって自殺していくということが、1984年の北里大学の研究で発表されている。

昔、日本が中国に昆布をたくさん輸出していたのかということ、中国の風土病で特に甲状腺腫が多くてヨードが足りないということで、ヨードを多く含む昆布が琉球を介してたくさん中国に行っていた。中国では昆布を薬局で売っている。

さらに、タカラバイオの10年の臨床試験の結果、肝細胞の増殖因子の産生を誘導することが分かっている。実際、昆布を食べている人は若い。従って、私は仕事に昆布を食べてもいいと言っている。しかし、何でも食べ過ぎたら毒である。毎日5~10g食べてほしい。

昆布の消費量は富山県がダントツだが、沖縄も長昆布を豚肉と炊いて食べている。この昆布は羅臼昆布と比べると安い。食べる量では過去3回ほど富山県は沖縄県に負けたことがあるが、最近はまだ富山県がずっと1位に復活している。沖縄は食生活が変わってハンバーガーの世界になり、肥満度が日本一になった。男性の長寿者が日本一だったのが、一気に十何位にまで下がっている。女性はまだ1番だが、もう少しでどこかに負ける。今、沖縄県はもう一度昔の食生活を見直そうと奔走しているところだ。



昆布の根っこの部分を元昆布（羅臼昆布だと根昆布）と言う。このシェアは当社が全国の30%を持っている。昔は新潟県は上越ぐらいまで、長野は松本ぐらいまで、東は魚津までだったが、今は富山や高岡などでも食べるようになってきている。私が一生懸命百貨店を通じて食べてもらうようにしたので、よく食べるようになったと思う。

ニシンの昆布巻きも富山から発祥したといわれている。これからのシーズンの富山では、ブリの子供のフクラギが1匹100~200円で手に入る。これを3枚に下ろして昆布にシめて冷凍庫に入れておき、お客さんが来たときに出してカットすると、全部食べられる。氷見の方で最初に始めた牛肉の昆布じめも、最近は富山の黒部でも肉屋さんが出すようになってきている。

昆布というのはどこも7月20日に一斉に棹を入れて採り出すが、棹を入れる前の昆布を棹前と言う。最近の温暖化で、今年あたりは7月10日ごろから一斉に採り始めたが、基本的に6月に根室、釧路で採れる昆布を棹前昆布と言う。特に北方領土の貝殻島の棹前昆布、中でもその元昆布はとても



おいしい。根っこの近くから伸びるので、ここがいつも一番若く、軟らかい。なおかつ肉厚なので、歯ごたえがありながら煮崩れしないということで、私のところではこの昆布が通販で一番売れている。

昆布を海から採って、天日に干してから、重ねて寝かせて重しを乗せる。これを按醸（あんじょう）作業と言う。耳刈というのは、昆布の端を成形する作業である。耳は、例の「昆布、昆布、昆布つゆ」という会社がどんどん買ってくれる。羅臼昆布の耳が一番高くて、去年は大減産だったので、その耳の値段が利尻昆布の立派な一等検と相場が一緒だった。この羅臼昆布を少し入れて、ほかの昆布と混ぜて利用しているようだが、羅臼昆布はそのぐらい味が濃い。



按醸（あんじょう）作業



耳刈作業

羅臼昆布はいつも 1 年分仕入れて、低温倉庫で寝かしている。ここは湿度が 60~65%、温度は 15 で 1 年間一定している。だから、きちんとしておけば 2 年でも 3 年でも大丈夫だ。しかし、もう少したつと風味が抜けておいしくなくなるので、1~2 年のうちにきちんとして販売をするようにしている。

3. 北前船と富山県

加賀の殿様は昔、大阪で米を売るのに、陸を渡って琵琶湖からまた船に乗せて、また馬に乗せて京都、大阪と走らせたが、これは非常にロスが多かった。加賀百万石のうち、五十万石は百姓にお渡しして、家臣に三十万石渡して、殿様は二十万石もらっていた。その二十万石のうちの七～十五万石を換金するために大阪に持っていき売っていた。馬に2俵を積んで人が1人付くが、そうすると人件費や馬のお金がかかるし、そのうち俵から米がぼろぼろ落ちたり、山賊に遭って盗まれたり、ロスが大変多かった。それで船で行くことを考えたのが1639年である。前田利常という三代目が始めて、これが北前船の原型といわれている。その後、1672年に河村瑞賢が大坂から蝦夷までの航路を開発した。それで初めて北前船が大阪と蝦夷を結ぶようになった。

江戸から明治中期にかけて隆盛を極めた北前船は、運賃船ではなく買い積み船である。どこに行けば物が安く仕入れられるか、どこに行けば物を高く売れるかを考えて、行く先を決めた。ここで、やはり一番大事なものは親方、船頭である。船頭の指示一つでもうかるかもわからないかが決まる。例えば北海道のサケが一番高く売れる所へ行き、そこでまた品物を買いながら、蝦夷から日本海側の西回り航路ですっと大阪まで瀬戸内を通して帰る。人や文化も運んでいた。大阪の歌がなぜ北海道にあるのか、九州の歌がなぜ富山にあるのかということ、全部北前船が運んだからだ。

一航海で千両の利益を出すというので千石船とも呼ばれたが、千両というと今のお金で1億である。今はそのような商売はないと思う。その代わり命懸けである。北前船は非常に危ない船で、甲板がない。つまり、上に板が張ってないのだ。おわんを長細くしたような形である。荷物をいっぱい積んで、ざぶんと海水をかぶるとみんなで出すしかなかった。遭難の確率が非常に高く、大変危険な船であった。

4. 北前船に関係する人々

北前船に関係する人は、皆さんご存じの方ばかりである。紀伊國屋文左衛門、高田屋嘉兵衛、銭屋五兵衛。銭屋五兵衛は金沢の金石の人で、40歳で中古の船を買って、北前船の親方になる。彼のすごいところは、全国に168人の手代と番頭を置いて、飛脚に走らせて、情報を自分で集約していたことだ。どこに行けば何が高く売れて、どこに行けばどういうものが引きなのか、どこに行けば何が安いのかを全部把握していた。当時の北前船は情報の遅れを利用して商売をしていた。彼は早く情報を仕入れてうまく商売をした。彼は前田の殿様のために、献金もたくさんしていた。また、農民のために農地を増やそうと河北潟の干拓もしていたが、その潟に毒を流したという疑いをかけられて、結局監獄に入れられて獄死する。番頭も処刑、資産は没収である。今のお金に直して6000億円という、とんでもないぐらいのお金を持っていた。

馬場道久は富山県の方である。馬場家は代々北前船の親方を続けて蓄財していく。そして道久の没後、奥さんのはるが、今の富山大学、旧富山高校を建てるのに今のお金に直して 150 億円の寄付をしている。また、小泉八雲のヘルン文庫も寄付し、今は富山大学に開設されている。いろいろな銀行、北陸銀行の前身の十二銀行の取締役や岩瀬銀行の頭取などもされたということだ。また、多額納税者の全国の 9 位にランクされたこともある。

藤井能三は伏木の方で、小学校や測候所をつくった。この方は江戸から明治に変わる時の日本の中枢の人たちと交流があった。最後は三菱と競争になり、負けて破産している。

また、小樽の運河沿い赤いレンガの倉庫がたくさんあるが、あれはみんな福井県、石川県の北前船の親方の倉庫であった。

それから、富山県の岩瀬に森家がある。屋号が「四十物屋仙衛門」と私と同じ名前なので、私はそれで北前船を少し勉強するようになった。実は、乾物でもない、生ものでもない間のものが 40 ある。一夜干のお魚を「あいもの」と言い、それを扱っている人のことを「あいものや」と言った。また、そういう方々が集まった町内を四十物町と言う。私の出身地も黒部市生地四十物町である。富山市にも西四十物町がある。敦賀にも 1620 年に四十物町があったという文献を見付けた。佐渡島にも現在四十物町がある。恐らく北前船の寄港地にそういう魚を扱っていた人たちがいたのであろう。ちなみに、四十物の中に昆布は入るのかなと思っていたが、どうも入らないような感じだ。

北前船主が頭がいいのは、自分は船に乗っていなくても、船頭と若い衆を雇って、両方にお互いを見張らせている。船頭は親方の荷物のほかに 1 割～1 割 2 分の荷物を載せて、自分で売り買いできた。だから、「船主船持ち、船頭金持ち」という言葉がある。逆に、飯炊きなどの水主（かこ）たちは、親方ともうけた利益のうちの何パーセントがもらえるという約束をしているので、船頭が荷物を多く積まないように見張っている。最後に「切出（きりだし）」と言って、利益の中からお金をもらうのだが、そのときの「出目（でめ）」も切出の中に入っている。「出目」とは差額収入のことで、私の父が昭和 23 年か 24 年ぐらいに利尻でニシン場をやっていたときに、ヤミ船がいっぱい来て、樽に入ったニシンを「30 くれ」と言うと、「始まり」で一つサービス、1、2、3、4 と数えて 30 まできたら「おしまい」ともう一つサービスと、二つサービスをしてくれたそうだ。それが切出に入ってくる。北前船の 1700 年代から、何と昭和のついこの間までそういうことがあった。

5. 「長者丸」の遭難

「長者丸」は富山県の密田家所有の船である。船頭の吉岡屋平四郎だけがこの船による密貿易の話を知っており、あとの乗組員は知らなかった。大阪から米を積んで出港し、松前（北海道）に行き、北海道で昆布を積む。それから普通は西回りで大阪に入って、大阪で昆布を売ると同時に薩摩の砂糖も売っていたが、それだともうからないので、直接薩摩

に昆布を持っていくことを考え、太平洋を回ろうとした。それまで何回も太平洋に回っているという証拠が後でたくさん出てきている。たまたまそのとき片口屋八左衛門という表（航海士）が、西回りと聞いていたのに東回りは嫌だと船を下りてしまった。すると、佐渡の金六という男が「おれは東回りは得意だ。おれが代わりに運転してやる」ということで交替して乗り込んで太平洋を回るのだが、宮城県の金華山沖でマストが折れて遭難し、数カ月後アメリカの捕鯨船に偶然助けられる。その前に若い人 2 人がまず死んだので、金六は責任を感じて投身自殺をする。

そして、10 人の乗組員のうち 7 人が助かってハワイ島に着いた。ハワイ島に 1 年いて、日本に帰りたい一心だった。当時、中国から帰るのがいいとされていたが、中国はアヘン戦争をやっていたので危ないということで、彼らはカムチャッカを經由してオホーツクに行く。そこから、なぜかロシア領シトカ（現在のアラスカ）に行き、米田屋次郎吉はじめ 6 名がアメリカロシア商会という会社に世話になる。そして、シトカから択捉島に帰ってくるのだが、当時は鎖国なので犯罪者となった。択捉島から函館、江戸まで引き回されて取り調べられた、その様子が 10 巻 25 冊の本になって、東京大学の隣にある尊経閣文庫という前田の殿様の図書館に残っている。

ちなみに、北前船が衰退していったのは、情報の遅れを利用した商売であったのに、近代化による鉄道、電信の普及で、その情報の速さに負けたからである。

6. 北方領土について

富山県には、「北方領土返還要求運動」という看板がよくあがっている。北方領土からの引揚者は、富山県は北海道に次いで多く 1425 人いる。黒部市だけでも約 900 人いる。その後、そのほとんどの人は羅臼、根室、釧路に住み着いた。

私は 1994 年に、北方領土にビザなし交流の団員で行ってきた。水晶島とノサップ岬の間に貝殻島という岩礁があり、そこからノサップ岬までは 3.7km ある。その 3.7km の中間に、なぜか国境線が現在ある。漁師がたまにウニをそこに捕りにいくと、ロシア兵にいきなり頭を打ち抜かれて殺される。1993 年には、能登敬一船長が納沙布沖で銃撃を受け、捕まって、アナマワンの収容所に入れられた。人道援助で日本の医師が行って手術をして、今は能登さんは日本に帰っておられるが、1994 年に私が行ったときはまだアナマワンの収容所にいた。上陸したら遠い所で手を振っている人がかすかに見えたのであわてて写真を撮ったら、涙がぼろぼろ出てきた。同じ日本人が何であんな所にとらわれの身で入っているのか。最近調べたら、この収容所には今まで 4000 人いたということだ。

最近では、2006 年の「吉信丸」の銃撃事件がある。盛田さんという方がウニを貝殻島に捕りに行って頭を撃ちぬかれた。当時、外務大臣であった麻生太郎はかんかんになってロシア大使を呼びつけて、「何やってるんだ、日本の領土で」と言ったが、その後いっぺんに

弱腰になった。日本政府は（海上保安庁）は、「吉進丸」が日本側の設定したラインを越えたと言い出した。私は、日本側が設定したラインというのは、ウルップ島と択捉島の間ではないのかと言いたいのだが、今はロシアが認めたラインを結局日本は認めている。日本政府は少し弱腰ではないか。

この貝殻島の周辺は昆布が採れる所である。歯舞漁業協同組合や一部よその漁協組合が、民間交渉で昆布を採りに行く。6月に、決められたエリアにしか入れない。375艘の契約であるが、現在 249 艘になっている。高齢化が進み、昆布を採る人が少なくなっている。私は一生懸命昆布を売っているのだが、昆布が採れなくなったらどうなるのだろうと大変心配である。



貝殻島の昆布漁(歯舞群島貝殻島に向かっている漁船)



色丹島のマタコタン

この講座は、同じ内容で 10 月 16 日(金)19:00~21:00 にスルガ銀行「d-labo」(ミッドタウン・タワー内)でも行われました。